



Title	「居場所」をめぐる若者の経験―後期近代における生活実践に着目して―
Author(s)	水野, 聖良
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105386
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (水野 聖良)	
論文題名	「居場所」をめぐる若者の経験―後期近代における生活実践に着目して―
論文内容の要旨	
2000年代以降、若者支援としての「居場所」が全国的に拡大するなかで、「居場所」に関する研究も蓄積されてきた。しかしこれらの研究は、若者を特定の方向へと画一化して描く傾向があり、若者が家庭・学校・職場といった複数の生活世界を往還しながら、日々の出来事や関係性に応じて「居場所」との距離を調整し、その経験を生活の中に編み込んでいくという動態を十分に捉えてこなかった。 本論文の目的は二点である。第一に、若者を複数の生活世界を横断しながら日々を生きる生活者として捉える視点から、「居場所」をめぐる〈居場所〉と〈参加〉という二つの経験を再検討し、若者がいかなる状況や関係性のもとで「居場所」と出会い、その経験をどのように意味づけ、日常生活へと編み込んでいるのか、その過程を明らかにすることである。ここで〈居場所〉とは、心理的な安定や存在の確かさを支える経験を、〈参加〉とは社会参加や参画への接続に関わる経験を指す。とりわけ、これらの経験が若者にとってどのように「メタ・ライフ・ポリティクス」や「ライフ・ポリティクス」として立ち上がっているのかを、生活世界の連続性に即して捉える点に特徴がある。第二に、若者の経験を基点としてスタッフの実践を理解することである。すなわち、従来の支援枠組みに還元するのではなく、若者の生活状況との相互関係の中でスタッフの実践がいかに立ち現れ、若者にとってどのような意味を持ち得るのかを描き出す。 第1章では、「居場所」をめぐる先行研究を、若者の経験とスタッフの実践という二つの観点から整理した。従来の研究では、「居場所」を利用する若者は①排除・離脱を背景に支援対象となる若者、②運営や意思決定に主体的に参画する若者、③承認や社会関係資本の獲得を通じて外部社会へ移行する若者、といった規範的な像として描かれてきた。しかしこれらはいずれも、若者の変容を前提とした直線的な枠組みに基づいており、若者が複数の生活世界を往還しながら、その都度の状況に応じて「居場所」との距離を調整し、経験を生活の中へ編み込んでいくという動態的な実践を十分に捉えていないことを指摘した。また、若者像の画一化は、スタッフの実践理解にも影響を及ぼしてきた。若者の生活世界を横断する往還的な動きが捉えられていないため、スタッフの実践は「受容」「共感」「参加の促し」といった直線的な支援モデル上に配置されやすかった。これらの課題に対して本章では、移行研究・ライフコース研究が示してきた、生活者としての若者という視点を導入し、若者を病理的・規範的な枠組みに還元せず、複数の生活世界を横断しながら生を編んでいく主体として捉える本論文の分析視角を提示した。 第2章では、本研究の調査の概要を示した。分析の対象となるYユースセンターの位置づけを、市の若者支援政策や地域的背景とともに整理する。X市では、就労拠点性の高さから夜間人口が減少し、生活困難層の集住が進むなど、インナーシティ課題が顕在化していた。こうした地域状況のもとで、既存制度からこぼれ落ちる若者への支援が求められ、センターが設置された。本章では、X市の特徴と、そうした背景のもとで形成されたセンターの理念、および本研究の調査方法を述べた。 第3章では、Yユースセンターにおける若者とスタッフの関係性がどのように立ち上がり、〈居場所〉と〈参加〉の形成へと接続されていくのかを、関係性構築の初期段階に着目して検討した。従来の研究では、この初期段階への着目が十分ではなく、〈双方向的なかかわり〉の成立後に生じる〈居場所〉や〈参加〉の経験が中心的に論じられてきた。また初期段階に着目した議論においても〈双方向的なかかわり〉につながるかかわりとして単線的に位置づけられていた。これに対し本章の分析は、初期段階の実践が単なる準備段階ではなく、スタッフが若者に「また来てもよい」と感じられる状態をつくり出す実践そのものであり、〈居場所〉と〈参加〉双方の基盤形成に関わる重要な契機であることを明らかにした。スタッフは若者の「生きづらさ」を理解しつつも、それに過度に踏み込みすぎないように注意を払いながら、音楽・ゲーム・イラストなどの趣味嗜好や自身の関心を媒介として、若者の「生きづらさ」を一時的に後景化させ、関係性を立ち上げるための回路として活用していた。こうしてスタッフは、若者が	

安心して空間に滞在できるよう「若者と場」をつなぎ〈居場所〉形成の契機を、また「信頼できる大人」として認識されることを目指して「若者と大人」をつなぎ〈参加〉形成の契機を、その時々状況や相互行為の流れに応じて柔軟に実践していた。

ただし、〈居場所〉と〈参加〉という枠組み自体が、支援者や研究者の視点から論じられてきたに過ぎない。この点を踏まえ、第4章と第5章では若者自身の経験に焦点を当て、スタッフの意図や工夫が若者にどのように経験され、あるいはスタッフの意図から離れて若者がいかなる経験をしているのかを検討した。以降では、継続的にユースセンターを利用するようになった若者に焦点を当て、かれらが「居場所」をどのように意味づけ、そこでどのように〈居場所〉および〈参加〉を経験しているのかを、若者の視点から検討した。

第4章では、ユースセンターを継続的に利用する若者のライフストーリーを通して、通い始めた背景と、通い続ける過程で「居場所」に対する意味づけがどのように変容していったのかを検討した。また、その変容の背後には、若者とスタッフとのあいだでどのような相互行為が生じていたのかを明らかにした。分析の結果、若者がセンターとの距離を自ら調整しながら関係を組み立てている実践が浮かび上がった。若者は、その時々生活状況に応じて、スタッフの「受容」や「共感」をどの程度受け取りたいのかを調整し、必要なときにはスタッフに近づき、距離を置きたいときには関わりを弱めるといった行動を取っていた。そのため、スタッフによる関わりは、若者にとって「介入」と「放任」をも柔軟に行き来しているように受け取られていたが、実際には若者が関係の幅を調整していたことによって成立していたことが示された。こうした若者の距離の調整の実践があつて初めて、「受容」「共感」を基盤とするスタッフの姿勢が、若者にとって〈居場所〉として経験されていたのである。

続く第5章では、「居場所」を利用しつづける若者がどのような〈参加〉の実践を生み出しているのかという問いに応答するべく、ユースセンターにおける仲間集団の関係性と、その維持をめぐる内部のポリティクスに着目し、〈参加〉のあり方を再考した。従来の研究では、〈参加〉は主として、スタッフが準備したプログラムへの参加や、運営・意思決定への参画といった、組織的で可視化された活動を中心に捉えられてきた。しかし仲間集団に着目すると、若者同士が互いの困難を共有し、家出のサポートや関係調整といった日常的な相互実践そのものが、彼らが「居場所」に関わり続ける上で重要な役割を果たしていたことが明らかになった。これらの実践は、若者がスタッフから支援を受け取る被支援者としてだけではなく、仲間同士の関係性を維持する主体として「居場所」を経験している。また、こうした実践は、必ずしも従来想定されてきた〈参加〉としての外部社会への移行や参画といった目的と結びついているわけではなく、むしろ現在の生活をやりくりし、孤立を避けるための切実な営みとして行われていた。この知見は、〈参加〉を組織的活動への関与に限定せず、若者の関係性のなかで生じる日常的な実践として捉え直す必要があることを示唆している。

終章では、得られた知見の整理を行い、本論文の目的に照らして考察を行った。本論文は、若者を複数の生活世界を往還しながら日々を生きる生活者として捉え、「居場所」における〈居場所〉と〈参加〉の経験として再検討した。第4・5章の分析から明らかになったのは、若者の経験が、支援者の「受容」や「共感」によって一方的に形成されるものではなく、家・学校・職場といった複数の生活世界との往還の中で、その都度の状況に応じて場との距離や関わり方を調整しながら立ち上がっているという点である。〈参加〉もまた、企画や意思決定への参画といった規範的な形態に限られず、仲間関係を維持し、日常をやりくりしながら利用し続けることを可能にする営みとして把握された。若者は将来への不確実性と、日々の具体的な選択を同時に生きており、「居場所」はこうした二重の時間感覚が交差するなかで、「メタ・ライフ・ポリティクス」だけでなく「ライフ・ポリティクス」そのものが生成する場として位置づけられていた。これは、「居場所」を将来の構想を支える「メタ・ライフ・ポリティクス」に相当する取り組みとして捉え、そこから退出して外部社会に向かう過程のなかで「ライフ・ポリティクス」が立ち上がると想定してきた既存の議論における図式とは異なる姿を示している。他方、スタッフの働きは、問題解決や主体性形成を直接的に促す支援というよりも、若者が違和感なく滞在し続けられる環境を維持する実践として捉えられる。趣味嗜好を介した声かけや雑談といった日常的な働きかけが、若者に「また来てもよい」と感じられる基盤となっていた。こうした観点から、ユースセンターは若者が将来を構想しつつ、現在の生活を「なんとかやってゆく」ための社会的インフラとして位置づけられ、そのインフラを日々支えているスタッフ実践のあり方が浮かび上がった。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (水 野 聖 良)			
論文審査担当者	(職)		
	氏 名		
	主 査	教授	高田 一宏
	副 査	准教授	知念 渉
	副 査	教授	北山 夕華
論文審査の結果の要旨			
2000年代以降、若者支援としての「居場所」づくりに関する研究が蓄積されてきたが、これらの研究は、若者が家庭・学校・職場といった複数の生活世界を往還しながら、日々の出来事や関係性に応じて「居場所」との距離を調整し、その経験を生活の中に編み込んでいくという動態を十分に捉えてこなかった。 本論文はこのような先行研究の課題を踏まえ、二つの目的を設定している。 第一に、〈居場所〉と〈参加〉という二つの経験を再検討し、若者がいかなる状況や関係性のもとで「居場所」と出会い、その経験をどのように意味づけ、日常生活へと編み込んでいるのか、その過程を明らかにすることである。ここでいう〈居場所〉とはある特定の空間ではなく、心理的な安定や存在の確かさを支える経験をさす。また、〈参加〉とは社会参加や参画への接続に関わる経験を指す。 第二に、若者の経験を基点としてスタッフの実践を理解することである。すなわち、スタッフから若者へという一方通行的な支援枠組みに還元するのではなく、若者の生活状況との相互関係の中でスタッフの実践がいかに立ち現れ、若者にとってどのような意味を持ち得るのかを描き出すことである。 本論文の中核をなす第3章から第5章の内容はつぎの通りである。 第3章「スタッフによる関係性の構築」では、「ユースセンター」（仮称）における若者とスタッフの関係性がどのように立ち上がり、〈居場所〉と〈参加〉へと接続されていくのかを、関係性構築の初期段階に着目して検討している。 従来の研究では、この初期段階への着目が十分ではなく、〈双方向的なかかわり〉の成立後に生じる〈居場所〉や〈参加〉の経験が中心的に論じられてきた。これに対し本章の分析は、初期段階の実践が単なる準備段階ではなく、スタッフが若者に「また来てもよい」と感じられる状態をつくり出す実践そのものであり、〈居場所〉と〈参加〉双方の基盤形成に関わる重要な契機であることを明らかにした。スタッフは若者の「生きづらさ」を理解しつつも、それに過度に踏み込みすぎないように注意を払いながら、音楽・ゲーム・イラストなどの趣味嗜好や自身の関心を媒介として、若者の「生きづらさ」を一時的に後景化させ、関係性を立ち上げるための回路として活用していた。こうしてスタッフは、若者が安心して空間に滞在できるよう「若者と場」をつなぎ〈居場所〉形成の契機を、また「信頼できる大人」として認識されることを目指して「若者と大人」をつなぎ〈参加〉形成の契機を、その時々状況や相互行為の流れに応じて柔軟に実践していた。 第4章「若者が「居場所」を〈居場所〉とする過程」では、ユースセンターを継続的に利用する若者のライフストーリーを通して、通い始めた背景と、通い続ける過程で「居場所」に対する意味づけがどのように変容していったのかを検討している。そして、その変容の背後に若者とスタッフとのあいだでどのような相互行為が生じていたのかを明らかにしている。 分析の結果、若者がセンターとの距離を自ら調整しながら関係を組み立てている実践が浮か			

び上がった。若者は、その時々々の生活状況に応じて、スタッフの「受容」や「共感」をどの程度受け取りたいのかを調整し、必要なときにはスタッフに近づき、距離を置きたいときにはあえて関わりを弱めるといった行動を取っていた。そのため、スタッフによる関わりは、若者にとって「介入」と「放任」をも柔軟に行き来しているように受け取られていたが、実際には若者が関係の幅を調整していたことによって成立していたことが示された。こうした若者の距離の調整の実践があつて初めて、「受容」「共感」を基盤とするスタッフの姿勢が、若者にとって〈居場所〉として経験されていたのである。

第5章「集団から見た「居場所」をめぐる〈参加〉の様相」では、ユースセンターにおける仲間集団の関係性と、その維持をめぐる内部のポリティクスを分析し〈参加〉のあり方を考察している。

従来の研究では、〈参加〉は主として、スタッフが準備したプログラムへの参加や、運営・意思決定への参画といった、組織的で可視化された活動を中心に捉えられてきた。しかし仲間集団に着目した分析によって、若者同士が互いの困難を共有し、家出した友人のサポートや友人同士の関係調整といった日常的な実践そのものが、彼らが「居場所」に関わり続ける上で重要な役割を果たしていることが明らかになった。若者はスタッフから支援を受け取る被支援者としてだけではなく、仲間同士の関係性を維持する主体として「居場所」を経験している。また、こうした関係的な実践は、必ずしも従来想定されてきた〈参加〉としての外部社会への移行や参画といった目的と結びついているわけではなく、むしろ現在の生活をやりくりし、孤立を避けるための切実な営みとして行われていた。

本論文は、若者の経験が、支援者の「受容」や「共感」によって一方向的に形成されるものではなく、家庭・学校・職場といった複数の生活世界との往還の中で、その都度の状況に応じて場との距離や関わり方を調整しながら立ち上がっていることを明らかにした。〈参加〉もまた、企画や意思決定への参画といった規範的な形態に限られず、仲間関係を維持し、日常をやりくりしながら利用し続けることを可能にする経験として把握されている。若者は将来への不確実性と、日々の具体的な選択を同時に生きており、「居場所」はこうした二重の時間感覚が交差するなかで、「メタ・ライフ・ポリティクス」だけでなく「ライフ・ポリティクス」そのものが生成する場として位置づいていることを明らかにした。

一方、スタッフの働きかけは、若者が違和感なく滞在し続けられる環境を維持する実践として捉えられた。趣味嗜好を介した声かけや雑談、日常的な働きかけが、若者に「また来てもよい」と感じられる基盤となっていた。ユースセンターは若者が将来を構想しつつ、現在の生活を「なんとかやってゆく」ための社会的インフラとして位置づけられ、そのインフラをスタッフの実践が日々支えていることが明らかになった。

本論文は、長期にわたるフィールドワークにもとづいて若者の生活世界を描きだしたユニークなエスノグラフィーとして高く評価できる。ユースワークや社会教育・青少年教育に対しても多くの理論的・実践的な示唆を与えている。これらの理由から、本論文は博士（人間科学）を授与するにふさわしい内容を備えていると判断した。